１　令和３年度の方針

　　　令和３年度は、特色ある教育活動を他校に継承・発展させる機能統合による学校の再編整備に着手する。

２　機能統合により再編整備する学校

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 対象校（所在地） | 機能統合先となる学校（所在地） | 対象校募集停止時期 | 機能統合開始時期 |
| 高校（島本町） | 高校（高槻市） | 令和５年度入学者募集時 | 令和５年度から  |
| 高校（大阪市鶴見区） | 高校（大東市） | 令和５年度入学者募集時 | 令和５年度から  |
| 高校（阪南市） | りんくう高校（泉南市） | 令和５年度入学者募集時 | 令和５年度から  |

１-２

３　対象校の選定理由

機能統合による再編整備

* 1. 島本高校と阿武野高校

**・　島本高校**は、昭和49年に普通科として開校した。平成23年度からは「保育専門コース」を設置し、幼稚園教育要領の５領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）を意識したカリキュラムの中で、近隣の保育所での体験実習や大学等と連携した特別講義、充実したピアノ指導等を行っている。

また、生徒が企画した行事を通じて海外の高校と交流を深める等、コミュニケーション力の向上や英語教育の充実につながる取組みも行っている。

しかし、学校や関係者の尽力にもかかわらず、中学校卒業者数が減少する中、同校では平成31年度以降３年連続して入学を志願する者が定員に満たない状況（令和3年度選抜：158人）が続いており、また、同校の在籍生徒の主たる居住地である高槻市における今後の中学校卒業者数も減少傾向にあることから、同校を志願する者の数の改善が見込めない状況となっている。

・　島本高校から南西約7.3㎞に立地する**阿武野高校**は、昭和58年に普通科として開校し、平成18年度には「スポーツ専門コース」と「福祉専門コース」を設置した。現在は「福祉専門コース」を「福祉・保育専門コース」に変更し、授業を通じて高齢者・障がい者・子どもとの関わり方を学ぶことをめざして、大学や福祉団体と連携した参加型授業や、高齢者施設・障がい者施設、保育所での体験実習等を行っている。また、アメリカの高校と姉妹校提携を結んで短期留学を行うなど国際交流も行っている。

加えて、平成13年度から５年間の「知的障害のある生徒の高等学校受入れに係る調査研究」を経て、平成18年度から「知的障がい生徒自立支援コース」を設置し、「ともに学び、ともに育つ」教育を推進している。

・　島本高校が「保育専門コース」で培ってきた、授業や実習を通じて体験的に学び、進学後に必要な技術を習得するノウハウを阿武野高校の「福祉・保育専門コース」に継承・発展させ、教育内容の充実を図る。あわせて、島本高校で行っている生徒主体の国際交流のノウハウを阿武野高校に継承し、交流のすそ野を拡げる。

・　以上のように、島本高校の特色ある取組みを阿武野高校に継承・発展させる機能統合を実施する。

１-３

≪参考≫

１．入学者数の状況

＜島本高校＞



＜阿武野高校＞



２．全入学者に占める１つの行政区（高槻市）から両校に入学した生徒の割合（令和３年度）

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 行政区 | 島本高校 | 阿武野高校 |
| 高槻市 | 45.1% | 81.3% |

３．今後の中学校卒業者数の見込み

≪高槻市≫

※　学校基本調査（令和２年５月１日現在）による府内公立小・中学校在籍児童・生徒数から推計したもの。

１-４

* 1. 茨田高校と野崎高校

**・　茨田高校**は、昭和50年に普通科として開校した。平成22年度には仲間どうしの話合いを通じて問題を解決するピア・メディエーションの手法を取り入れた「コミュニケーションコース」を設置し、地域社会で活躍できるコミュニケーション力豊かな人材の育成を図るとともに、習熟度別少人数授業や終礼時に行う数学・英語等の小テスト「茨田検定」により基礎定着と学力の向上をめざす取組みを行ってきた。

また、あいさつ運動や地域の清掃活動への参加、地域の中学校の部活動を招いて実施する「茨田カップ」の開催など、地域と連携した取組みを行ってきた。

・　また、茨田高校から東へ約5.0㎞に立地する**野崎高校**は、昭和51年に普通科として開校し、生徒一人ひとりの進路希望に応じた「Activeコース」、「Basicコース」、「Challengeコース」の3つのコースを設置し、資格取得を目標とする授業など多様な選択科目を設けるとともに、地域とともに取り組む人権教育や清掃活動、保育園との連携等を通じ、地域に根ざした高校として、生徒の多様な進路実現を図ってきた。

・しかし、学校や関係者の尽力にもかかわらず、中学校卒業者数が減少する中、茨田高校では平成31年度以降３年連続して入学を志願する者が定員に大きく満たない状況（令和3年度選抜：129人）が続いており、野崎高校においても、平成31年度以降３年連続して入学を志願する者が定員に満たない状況（令和3年度選抜：52人）が続いている。

加えて、両校の在籍生徒の主たる居住地の行政区（門真市、大阪市城東区、大阪市鶴見区、守口市、大東市、寝屋川市、東大阪市）における今後の中学校卒業者数も減少傾向にあることから、入学を志願する者の数の改善が見込めない状況となっている。

・　そこで、茨田高校が「コミュニケーションコース」で培ってきた、より良い人間関係を構築するための豊かなコミュニケーション力を育成するノウハウを、野崎高校に継承・発展させる。あわせて、両校が取り組んできた挨拶運動や地域の清掃活動、ボランティア活動など地域に根ざした教育活動の充実を図る。

・　以上のように、茨田高校の特色ある取組みを野崎高校に継承・発展させる機能統合を実施する。

１-５

≪参考≫

１．入学者数の状況

＜茨田高校＞



＜野崎高校＞

２．全入学者に占める７つの行政区（門真市、大阪市城東区、大阪市鶴見区、守口市、大東市、寝屋川市、東大阪市）から両校に入学した生徒の割合（令和３年度）

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 行政区 | 茨田高校 | 野崎高校 |
| 門真市大阪市城東区大阪市鶴見区守口市大東市寝屋川市東大阪市 | 78.3% | 55.8% |

３．今後の中学校卒業者数の見込み

≪門真市、大阪市城東区、大阪市鶴見区、守口市、大東市、寝屋川市、東大阪市の合計≫



※　学校基本調査（令和２年５月１日現在）による府内公立小・中学校在籍児童・生徒数から推計したもの。

１-６

* 1. 泉鳥取高校とりんくう翔南高校

**・　泉鳥取高校**は、昭和51年に普通科として開校した。生徒の希望に応じて進学・就職のどちらにも挑戦できる学校として、習熟度別により基礎から丁寧に学習できるきめ細かな授業や、資格取得に向けた放課後学習会等に取り組んできた。また、単位認定を行うインターンシップや体験型進路ホームルーム等によるキャリア教育の充実を図っている学校である。加えて、「国際交流基金 関西国際センター」（田尻町）や地元公民館での活動への参加など地域に根ざした教育活動を行っている。

しかし、学校や関係者の尽力にもかかわらず、中学校卒業者数が減少する中、同校では平成31年度以降３年連続して入学を志願する者が定員に満たない状況（令和3年度選抜：80人）が続いており、また、同校の在籍生徒の主たる居住地の行政区（阪南市、岸和田市、泉佐野市、泉南市、貝塚市、泉南郡）における今後の中学校卒業者数も減少傾向にあることから、同校を志願する者の数の改善が見込めない状況となっている。

・　泉鳥取高校から北へ約3.2㎞に立地する**りんくう翔南高校**は、泉南高校と砂川高校を統合整備し、平成21年に普通科として開校した。「未来を力強く生き抜く強くて思いやりのある人材」を育成するため、地域の様々な関係機関と連携し、「豊かな人間性」、「健康体力」、「確かな学力」のバランスが取れた教育活動に取り組んでいる。

放課後の５教科特別授業「特講」の実施など、生徒一人ひとりの進路実現をめざしたきめ細かな指導を行い、基礎学力とともに大学進学への応用力を身に付けられる高校である。また、専門コースである「ハートフルほいくコース」を設置し、豊かな心や優しさを培い、幼児教育にかかわる現場で活躍できる人材の育成もめざしている。

・　りんくう翔南高校に泉鳥取高校がこれまで取り組んできたインターンシップや体験型進路ホームルーム等のキャリア教育のノウハウを継承し、りんくう翔南高校のキャリア教育や「ハートフルほいくコース」における保育園実習などの充実を図る。あわせて、泉鳥取高校がこれまで進めてきた地域に根ざした教育活動のノウハウも継承する。

・　以上のように、泉鳥取高校の特色ある取組みをりんくう翔南高校に継承・発展させる機能統合を実施する。

１-７

≪参考≫

１．入学者数の状況

＜泉鳥取高校＞

＜りんくう翔南高校＞

２．全入学者に占める６つの行政区（阪南市、岸和田市、泉佐野市、泉南市、貝塚市、

泉南郡）から両校に入学した生徒の割合（令和３年度）

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 行政区 | 泉鳥取高校 | りんくう翔南高校 |
| 阪南市岸和田市泉佐野市泉南市貝塚市泉南郡 | 97.5% | 95.0% |

３．今後の中学校卒業者数の見込み

≪阪南市、岸和田市、泉佐野市、泉南市、貝塚市、泉南郡の合計≫

※　学校基本調査（令和２年５月１日現在）による府内公立小・中学校在籍児童・生徒数から推計したもの。

１-８